

対話型日本語教室から発信：外国人住民の医療へのアクセスを考える

とよた日本語学習支援システム 清水きよ恵

1. 設定した課題とその背景

外国人住民が医療を受ける際に感じる「ことばの壁」「こころの壁」「制度の壁」。これらの壁を低くし、自分ひとりでも安心して医療機関にかかれるようにすることが、誰もが暮らしやすいまちの実現につながるのではないだろうか。

多くの日本語教室で長年取り組まれてきた「医療・病院」というテーマは、外国人住民の日本語習得の促進だけで実現することは難しく、社会全体が外国人住民に歩み寄る意識の変化が必要だ。外国人住民の医療アクセスの改善を図るためには、住民・医療機関・行政の各関係機関の連携体制が必須だが、その体制づくりはもとより情報共有が難しい現状を対処すべき課題として捉え、本取組に着手した。

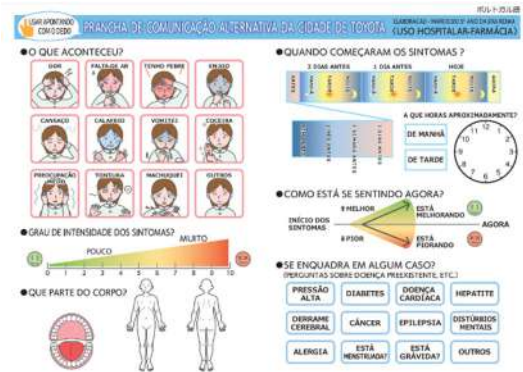
地域の日本語教室に集まる生活者のリアルな声を発信することによって、豊田市が掲げる「誰もが尊重され、暮らしやすいまちの実現」の実現に向け関係各所とのネットワークならびに協働の足がかりとしたい。日本語能力によって外国人住民が受けられる医療の選択肢が狭まることがない社会を目指すための一歩となるように。

2. 実践した内容とふりかえり

【実施計画】豊田市が主催する対話型日本語教室において、

- 医療版「コミュニケーション支援ボード」(2023年3月 豊田市制作)を使用した体験型プログラムを実施する。
＝「ことばの壁」「こころの壁」対応
- 日本語教室に関わる様々な参加者の声を取りまとめ、自治体や医療機関等と外国人住民の現状について情報共有を行う。
＝「制度の壁」への対応

(右図)豊田市コミュニケーション支援ボード(ポルトガル語版)表面



【実践内容とふりかえり】

実践内容 (一部予定)	ふりかえり (考えたこと・困難だったこと)
教室活動	
① 出前講座の活用 コミュニケーション支援ボードの使い方について	<ul style="list-style-type: none"> ● コミュニケーション支援ボード制作・頒布担当部署の出前講座を利用し、市内の教室担当者(希望者のみ)の基礎理解・情報共有ができた。 ● 障害者が避難した場合のツールを医療用に改訂して制作された経緯から、出前講座の内容を教室活動の目的に合うようにカスタマイズする必要があった。 ● 外国人住民の医療に関連する行政担当部署の役割が理解できた。
② 1回目教室実施 11月実施	<ul style="list-style-type: none"> ● 教室参加者全員へのツール認知度が向上、医療系大学の学生参加あり。日本語ボランティア(以下ボランティア)と外国人住民の医療アクセスに対する問題意識を共有することができた。 ● 教室活動の中で情報量のコントロールが難しかった。対話の要素に加え、さまざまな日本語レベルの学習者がいる教室で、情報過多にならない調整ができたかどうか把握しにくい。 ● 学習者にとってはJLPT試験日間近であったこと、ボランティアにとっては行事等が多い時期だったためか参加者集めに苦労した。結果、アンケート回収数は学習者7、ボランティア10に留まった。
③ 2回目教室実施予定 3月上旬	<ul style="list-style-type: none"> ● 医療系大学や学生の協力が得にくい時期での実施スケジュールになってしまった。年間スケジュールをたて、計画的な提案が必要。 ● 前回のアンケート回答を参考に2回目活動内容を検討する。希望内容が分散しているため、優先順位と実現可能性をあわせて精査する必要がある。

情報発信・情報収集	
④ 医療従事者	<ul style="list-style-type: none"> 個人的な関係先へのヒアリングに留まった。外国人住民がかかっている医療機関との人脈づくりに時間を要する。
⑤ 医療関係大学	<ul style="list-style-type: none"> 国際看護の実体験を得られる場として関心を示す大学（担当教官）が複数ある。継続的なアプローチにより今後の可能性に期待したい。 学生ボランティアの募集時期が適切でなかった（実習等の多忙な時期だった）。大学や担当教官に協力依頼をするには、前年度からの折衝が望まれる。
⑥ 行政関係部署	<ul style="list-style-type: none"> 住民の声を行政に届けるためにもアンケート母数をふやしたい。単体教室で1期につき1回ではなく、多くの意見を集められる効率的な教室開催方法を検討したい。 行政の縦割り体制を「連携」させるためのキーファクターが見えてこない。
⑦ 他市開催の教室見学 2月中旬	<ul style="list-style-type: none"> 他市で開催する「医療」をテーマにした教室活動を見学・参考にする。

3. 実践をとおして地域日本語教育コーディネーターとして果たした役割

- 1) 専門家や行政担当者からのアドバイスを参考に、日本語教室で取り扱う情報の範囲や内容を調整・整理し、次年度へつながる医療版「コミュニケーション支援ボード」を活用したプログラムづくりに着手した。
- 2) 日本語教室参加者（ボランティア含む）に市の取り組みを周知し、日常生活の中での気づきを促すことや身近な学習者＝外国人住民の困り感や置かれている状況を知るきっかけづくりができた。
- 3) アンケートの実施により、外国人住民（学習者）が医療の分野で何を求めているかの調査を行った。これにより、「医療」に関する新しい教室プログラムをつくっていくためのヒントを見つけることができた。

4. 地域日本語教育コーディネーターとして自身が大切にしたい視点

- 1) 地域にひらかれた教室・日常生活の延長線上にある教室
様々な市民が参加する対話型教室でありたい。専門的な内容の場合でも「実用的な情報提供」だけでなく「相互理解」のための対話も取り入れ、教室での協働は社会の一場面であることを忘れないようにしたい。
- 2) 日本語教室は住民のリアルを知る情報発信基地
地域の日本語教室は、様々な背景や生活環境にある住民のリアルな声が集まる貴重な場である。この声を行政に届けられるよう、または行政担当者が参加者の声に関心を寄せてくれるよう、教室外への発信にも注力したい。
- 3) 関係構築には活動の継続が重要
今年度着手したことをすぐ具現化することは難しく、結果を急がずじっくりと取り組んでいくことが必要。特に組織や団体との関係づくりでは、趣旨に賛同し協力してくれる人物を見極めつつ、あきらめずに活動を継続することで信頼獲得につなげたい。

5. 今後の展望

医療の分野は多岐にわたっており、日本語教室で取り扱う内容の選定が難しい。どの分野の、具体的には何を、どんなタイミングでコース内に組み込んでいくか、生活者にとっての優先順位を考慮しながら年間または数年にわたる中長期計画が必要だと感じた。また、個別プログラムを検討していく際には、テーマ毎での適切な Can-do 設定が重要であること、それがコーディネーターの役割であることも研修をとおして再認識することができた。

「医療」をテーマとした教室プログラムを整備することによって、市内どの教室でも同様の活動ができるような仕組みも必要だろう。複数拠点（教室）で集めた参加者の声を発信し行政を動かすことが、誰にとっても暮らしやすいまちの実現につながるはずだ。そのためにも、行政と医療機関、若手の医療従事者を育成する大学を本取組みに巻き込むことの意義は大きいと考えている。

本取組みは決して真新しいテーマではないが、日本語教室の課題に限定せず、社会問題として行政に放り投げてしまうのではなく、生活を共にする同じ住民として、互いに向き合うことによって生み出す真の多文化共生によって、社会的な課題の解決につながるような道筋づくりを目指していきたい。

以上